

感性を育む和学講座第 12 回

～十干十二支と睦月の行事・やまと言葉神話古事記について～

令和四年の干支は寅です。

この「干支」は「十干十二支（じっかんじゅうにし）」の略です。

旧暦での日本の歴史的な出来事は「壬申の乱」、「戊辰戦争」など十干十二支で表されていました。干支で年を表現することを干支紀年法と言います。

まず今回は「十干」について考えてみましょう。

十干は紀元前十三、四世紀の中国の殷時代(紀元前 17 世紀頃～紀元前 1046 年)に生まれ、日本に伝わります。

甲（こう）・乙（おつ）・丙（へい）・丁（てい）・戊（ぼ）・己（き）・庚（こう）・辛（しん）・壬（じん）・癸（き） の 10 の要素が十干です。

月の満ち欠け、例えば満月から次の満月までは 30 日周期となります。

陽数で聖数である 3 で割ると 10 となることから、十日を一句としたと

考えられます。

殷の「十日神話」も関係しているという説もあります。

殷の天帝である黄帝（中国の五帝の一人）の妻である羲和（ぎわ）が太陽である 10 人の子供を産みました。その 10 人の子供たちに甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸と名付けます。10 人の子供たちは、一人ずつ順番に天空で世界を照らすようになります。

しかし、やがて同じことを繰り返すのに飽きてしまい、堯帝の時代に 10 人が揃って世界を照らすことになりました。天空に 10 個の太陽が出るので、大地は乾き作物は全滅。地下から魔物が出てきて、世の中は悲惨な状態になります。堯帝は天帝の黄帝に相談します。

一人の太陽を残して後の 9 人の太陽を弓で撃ち落としました。それから、天に輝く太陽は一つになったというお話です。

荒唐無稽な話のようですが、この話は殷の歴史と密接に関わっているのです。殷は十王族が交互に国王になるという連合制だったのです。

「干」は木の幹枝、またはそれで作った三又のような武器を表す象形文字が元となっています。そして、「十干」は十日を一句とする数詞として考え出されました。

それぞれの意味は下記の通りです。

<p>甲 コウまたはカフ</p>	きのえ	甲羅や種の殻。冠、兜、優等の意味
<p>乙 オツまたはイツ</p>	きのと	曲がりくねるという意味
<p>丙 ヘイ</p>	ひのえ	かまどに火が燃えるという意味。明らかという意味
<p>丁 テイ</p>	ひのと	釘を打つという意味。頭数、人員、壮丁の意味もある
<p>戊 ボ</p>	つちのえ	樹木が茂るという意味
<p>己 キ</p>	つちのと	引っ張って直線にするという意味。まとめる、立つ の意味もある
<p>庚 ヨウ</p>	かのえ	実が熟する、新しく実る、改まるなどの意味
<p>辛 シン</p>	かのと	短剣で刺す、刺激する、からい、痛い、苦しい
<p>壬 ジン</p>	みずのえ	持っている、耐えている、妊娠、責任という意味
<p>癸 キ</p>	みずのと	四方に距離を測る、測量するという意味

他にも草木の成長過程を意味しているという説もあります。

十干は後に陰陽五行説と結びつけられました。訓読みの「きのえ」「きのと」の「え」は兄、「と」は弟を表しています。兄は陽、弟は陰となります。

五行の木・火・土・金・水を十干と結びつけました。

十干は五行説と合わせて五方（五つの方角・中央、東、西、北、南）と結びつけられます。そして、後に十二支、八卦も加わり、細かい二十四方(24の方位の総称)が用いられるようになります。



では、干支の「支」とは何でしょうか。

十二支の「支」とは幹の枝という意味があります。

古代中国において天空の方角を東から西に十二区分に分け（十二辰）、
記号として動物の名をつけたことに由来します。

覚えやすくするためか、後に動物が割り振られたのです。

それぞれの意味は下記の通りです。

子	ネ	ねすみ	繁殖、子供、養う、慈しむという意味。 繁殖力から鼠を連想したと思われま
丑	チュウ	うし	物の結び目、物事の要領という意味。中国で チュウの発音が 牛の発音と似ていることか ら「うし」となったと考えられます。
寅	イン	とら	慎む、油断しないという意味。人が警戒す る、油断できない動物として虎が連想された のです。
卯	ボウ	うさぎ	開く、出るという意味。「卯」という文字の形 が耳の大きいうさぎを連想させました。
辰	シン	たつ	本来は龍の星座（さそり座）を表す文字。 天空で一番光を放つ木星のことであり、太陰 神が宿るとされています。
巳	シ	み	蛇という意味。古代中国では蛇と名付けられ た星座があり、その名残と思われま
午	ゴ	うま	穀物をつく杵という意味。 ゴという発音が伍と似ており、 伍は仲間・群 れを作るという意味で、群れを作る動物から 馬が連想されたと思われま
未	ビ	ひつじ	まだ～しない、という意味。ビという発音が 中国での羊の鳴き声と似ていることから、羊 が割り振られたのでしょ
申	シン	さる	屈伸する胴体という意味。 身体が柔軟で、手足が伸び縮みする動物とし て猿が連想されました。
酉	ユウ	とり	酒、醸造物という意味。「酉」という古形の文 字が水鳥という字に似ていることから鳥が充 てられたと思われま
戌	ジュツ	いぬ	武器で勢いを見せる、という意味。 家の前で外敵を威嚇する犬が考えられまし
亥	ガイ	いのしし	草木が地上に根を張っている様。 「亥」の古字が猪を表す文字と似ていたことか ら、猪が充てはめられたと思われま

さて、十二支の順番ですが、ご存じのように「子（鼠）」から始まります。この順番が決まったのには、下記のお話があります。

昔、年末に神様が動物たちに
に告げました。一月一日の朝
御殿に着いて挨拶したものを
ら 12 番まで、順に一年ずつ
その年の大将にする、と。



牛は、自身で足が遅いのを認識していたので、前の晩から出発しました。鼠はちゃっかりしていて、牛の背中に乗ってゴール直前に背中から飛び降り御殿に入ったので 1 番です。

前日の夜から出発した、牛は 2 番になったのですが、怒りません。

2 番になれただけで充分と思ったのです。

足が速そうな、虎は 3 番です。実は虎、この話を最初は信じていませんでした。しかし、もしこの話が本当で参加しなければ、自分はビリになり、恥をかくことになりかねないと思い、途中で参加したので 3 番というわけです。

4 番は兎で、龍は 5 番でした。兎は、みんなが休んでいる間もピョンピ

ヨン飛んでいたのです。

蛇は龍と同着でしたが、毎日修行をしている龍を尊敬しており、順番を譲り6番になりました。

馬と羊は、マイペースで進みます。羊より足の速い馬が7番になり、羊は8番です。

次に、猿、鶏、犬の順番になります。猿と犬が喧嘩をしていて、その喧嘩の仲裁に入ったのが鶏というわけです。仲が悪いことを「犬猿の仲」と言うのは、この話が由来という説があります。そうして、猿が9番、鶏が10番、犬が11番です。

最後が猪で12番となります。猪は凄いスピードで神様の元へ突っ走りますが、勢い余って、神様の元を通り過ぎてしまい、戻ってきたときには最後になっていたのです。

こうして十二支の順番が決定いたしました。

ちなみに、猫が入っていないのですが、猫は鼠に、神様に挨拶に行く日を一月二日と伝えられます。鼠に騙された猫はそれ以来、鼠を追いかけるようになったそうです。

十二支は方位や時刻を表すのにも使われていました。

今でもなじみのある「鬼門」ですが、方角は東北となり、十二支で表すと、丑寅（うしとら）の位置になります。鬼は牛のような角があり、虎の皮のふんどし、または腰布を着けている姿に描かれています。

前稿の十干と十二支が組み合わされて、十干十二支となり干支と略され、干支（えと）として今に受け継がれています。

睦月の行事

一月一日～一月七日

大正月 年神様、祖霊を迎える

一月七日～一月十五日

小正月 豊饒を祈願 女正月 以前は一月十五日までが松の内

農機具に感謝を捧げる

左義長

左義長

左義長の語源は、中世の「三毬杖」という遊具だと云われています。平

安時代の新年の貴族の遊びに「毬杖（ぎっちょう）」という杖で毬をホッケーのように打ちあうものがありました。その「毬杖」を三脚にして火柱にしていたところから「三毬杖」から「左義長」となったという説が有力です。

地方によっては「どんど焼き」「とんど」などとも呼ばれますが、これは火が燃える様子を表しています。

小正月の火祭りは、さまざまな特色を持って全国に伝わっています。

正月飾りを焼く以外にも、この火であぶった餅を食べると、一年中病気にかからないとか、正月二日の書き初めをこの火で焼き、燃えさしが高く上がるほど、字がうまくなるという言い伝えがあります。

左義長は子供の行事として行われることが多いのも特徴です。

かつて、子供たちが集まって、お籠りする風習もありました。そのために、松などが仮設の小屋をつくるために使われました。子供たちによって集められた、注連縄などは最後に小屋ごと焼かれました。秋田県などの冬の風物詩である「カマクラ」も、元は小正月の火祭りのための小屋でした。

小正月の火祭りを「サイノカミ」「セーノカミ」と呼び、道祖神の祭りとして行われることも多く見られます。

また、この左義長の前に小豆粥を食べる習慣があり、『土佐日記』や『枕草子』などにも、

小正月に小豆粥を食べたと書かれています。

養蚕の予祝（前祝）を行ったり、「道具の年越し」として農具のミニチュアを飾り、豊作を祈願する習慣が残る地方もあります。

大正月は年神や祖霊をお迎えするための行事が多いのですが、豊作祈願など農耕に関連したことや家庭的な行事が多いのが小正月と言えます。

七草粥の七日まで忙しく働いた女性を休ませる意味で、小正月を「女正月」という地域もあります。

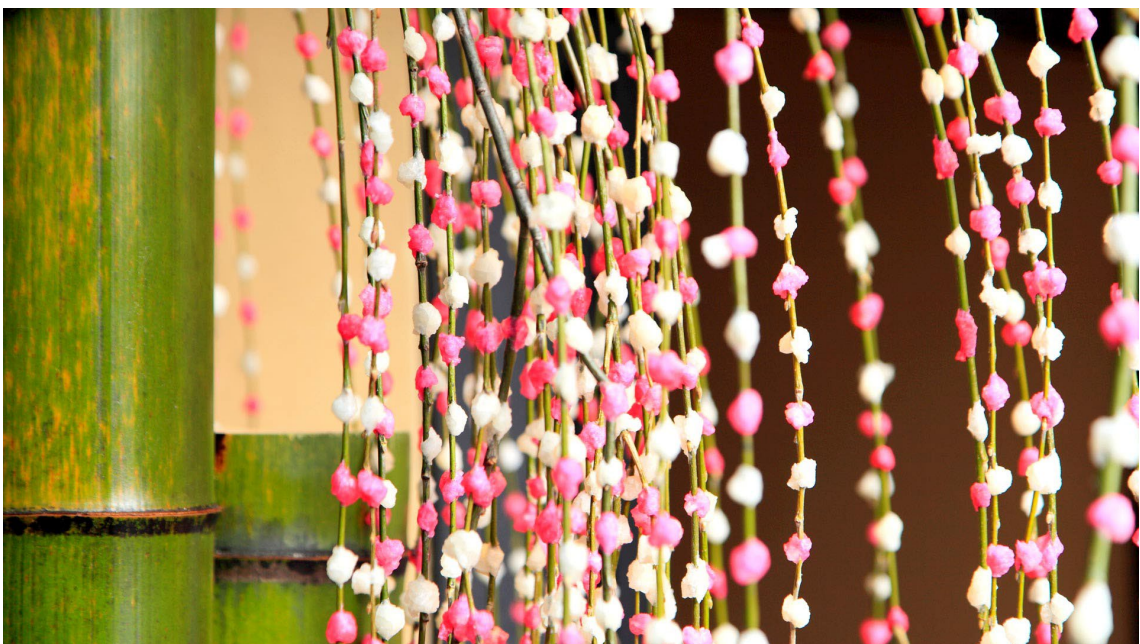
また、小正月の飾りとして、「餅花」があります。

養蚕の地域では繭玉を飾ります。

餅花の餅を左義長の火で焼いて食べるという風習もありました。江戸時代には「餅花」は盛んに飾られていたようです。

元旦、旧暦の新月（朔）から始まるお正月行事は、旧暦だと満月（望）の十五日である小正月で一区切りがつきます。

平成十一年までは小正月に元服の儀が行われていたことに因んで、一月十五日が成人の日でもありました。



お雑煮と花びら餅

お正月に食べるお料理といえば、お節料理の他に「お雑煮」もあります。そもそも、「雑煮」というのは醤油や味噌で味付けした汁に餅をいれた日本料理の一種です。

日本ではお正月に多く食べられ、雑煮に「お」を付けて「お雑煮」と称すると、お正月に食べる雑煮を思い浮かべます。

有職料理（平安時代、貴族によって形作られた饗応料理）の中にも餅を入れた吸い物がありますが、雑煮とは言わずに吸い物としています。

しかし、「ハレの日」に餅を食べる風習は平安時代からありました。

室町時代の書物に「雑煮」という言葉が残されています。宴の最初に食べる縁起の良い料理としてふるまわれていたようです。

「雑煮」の語源は、いろいろな具材を煮合わせて、煮雑ぜ（にまぜ）たことです。また、雑煮は古くは内臓を養い健全な状態に保つという意味で「保臓」と呼ばれ、保が烹（煮るという意味）となり、臓は種々のものをいれるので、同音の雑になり、「烹雑（ほうぞう）」から端的に「雑煮」となったと、『大阪府の郷土料理』（1988年東京・同文書院出版）には書かれています。

前年に収穫した米からつくり、お正月にやってくる年神様にお供えしたおさがりの餅を雑煮に入れていただくことから、お正月には欠かせない料理となったのです。

お雑煮には餅が欠かせないと思われていますが、近世以前では「餅なし正月」の地域もありました。お正月に餅を食べたり、神仏に供えたりすることを禁忌としていたのです。

主に畑作地帯の風習でした。畑作地帯は米を作るには適していないので、米以外の作物を育てていました。その地域では、米は外来の作物であり、土地の豊饒を神仏に祈る儀式において、外来の作物を供えるのは禁忌されていたのです。

米ができない畑作地帯では、蕎麦や里芋を神仏に供え、餅の代わりにお雑煮に入れていたのです。

しかし、石高制の幕藩制による政治的な圧力によって、また灌漑設備や新田開発もともない、米の生産は全国に広まってゆき、畑作地帯も米生産地帯と転換していくことで、餅が入った「お雑煮」は一般的になります。



お正月に食する「お雑煮」は前述のように、ハレの日に神仏へのお供えをおさがりとしていただく、ということ以外に「歯固めの儀式」にも関連しているという説もあります。

「歯固めの儀式」とは、平安時代の宮中でお正月に行われていた儀式の一つです。

鏡餅、大根、牛蒡など固いものを食べて、歯を丈夫にし、長寿を祈る儀式と云われています。

「歯」には年齢の意味があり、歯の健康が寿命に関係すると考えられていたのです。

そういえば年齢の「齢」には歯という漢字が含まれています。

いつの時代でも、歯は寿命とは関係があると考えられていたのです。

宮中で「歯固めの儀式」に出されていた「菱花びら餅」という料理があります。現代は和菓子の部類に入りますが、「宮中雑煮」「包み雑煮」と云われ、宮中でのお節料理のひとつでした。餅の上に赤い菱餅を敷き、その上に猪肉、大根、鮎の塩漬、瓜などをのせて食べていました。だんだんと簡略化され餅の中に具材を包んで配られるようになります。

そして、鮎は牛蒡、雑煮は味噌餡となりさらに簡略化されました。

「菱花びら餅」は、宮中に餅を納めていた川端道喜が最初につくったと云われています。

明治時代になって、裏千家家元十一世玄々斎が天皇陛下に献茶した際、宮中から「菱花びら餅」を賜り、その後初釜（新年の最初の茶事）のときに使うことを許可され、しだいに全国の和菓子屋さんでつくられるようになりました。

昭和の時代では、京都でしか、また、年が明けてからしか目にしませんでした。

今は、京都以外の地域でも、そして年末から店に並ぶようになっていきます。



やまと言葉神話

古事記について

古事記は712年元明天皇に太安万侶が編纂して献上しています。
我が国最古の歴史書です。
古事記には序文があります。

撰録帝紀 討覈舊辭 削偽定實 欲流後葉

訓読文: 帝紀を撰録(せんろく)し、旧辞を討覈(とうかく)して、偽りを削り 実
を定めて、後葉に流(つた)へむと欲(おも)ふ。

天武天皇の言葉です。

古事記以前にも「帝紀」「旧辞」「天皇記」などの歴史書がありました。
「天皇記」などの多くの書物は乙巳の変の後、蘇我蝦夷が邸宅に火をかけた際に燃
えてしまったのです。

天智天皇は白村江の戦などで史書編纂の余裕はなかったと考えられています。
壬申の乱が終わり、天武天皇が史書編纂に着手します。
知識の深い、記憶力に優れた舎人(役人)の稗田阿礼に、「帝紀」などの実の部分
を覚えさせ、暗誦させました。
元明天皇の時代に、太安万侶が勅命を受け、編纂し漢字で残しました。

全て漢文で記されていますが、読みは「やまと言葉」が多く使われ、一字一音表記
となっている箇所が多くあります。

例えば、「うましあしかびひこぢのかみ」を「宇摩志阿斯訶備比古遲神」のよう
に。

古事記の研究者は本居宣長が、賀茂真淵から万葉仮名の教えを受けて、30年以
上かけ「古事記伝」をまとめました。
現代に伝わる古事記に継承されています。